

全國山名氏一族會會報

第 3 号 昭和63年12月刊

発行所 全国山名氏一族会

〒667-13 兵庫県美方郡村岡町村岡 山名寺内

発行者 理事長 太田垣 泰明

電話 07969-8-1151

編集者 事務長 吉川広昭

振替 神戸1-54181



第3回全国山名氏一族会 S 63. 5. 28 於 依山楼 岩崎

第三回

全國山名氏一族會總會

倉吉会場に結集

第三回総会は、六分一

殿時氏公ゆかりの鳥取県
倉吉市で開催された。宿

舎は山陰の名湯・三朝温泉
依山楼。湯けむりのな

かで、東は茨城、西は鹿児島と文字通り全国から
馳せ参じた六十氏が、百
年の知己のように語り合
つた一刻に「さすが一族」
の感がさらに深まった。

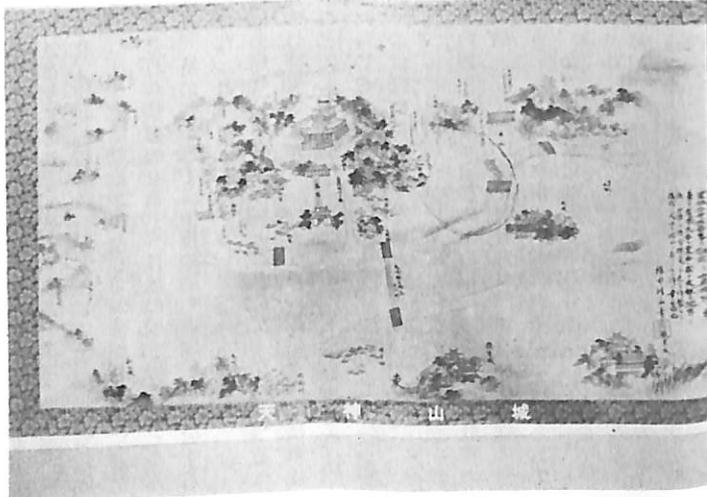
(参加者 六十五名)

山名氏資料館

山名藏に寄進二点

近世山名氏の祖、豊国（禪高）公遺愛の銅劍が山名晴彦氏（本会總裁）より、山名家菩提寺山名寺へ寄進された。

銅劍は、中國青銅器時代（周・戦国時代）のもので、保存状態もよく、美術的価値はもとより、秘蔵された豊国公をしのぶにふさわしい絶品である。



銅劍

禪高公遺愛 一振

因幡山名氏が築城した天
神山城（鳥取市布勢天神山）
の古絵図写真が山名藏に贈
られた。施主は因幡山名氏
の末裔・宇野誠一氏。

（本会会員）

往古を目のあたりにする
ような良き史料である。

《会員会友總数一〇三名》

発会三年目にして、はやくも、
百名の大台を突破しました。同姓
とはいえ、おたがいに見ず知らず
の間がらですのに、わずか一片の
ご案内状でこれだけの成果を收め
たとは……。

やはり、「血は水よりも濃い」と
か。今さらながら一族の共有する
栄光と伝統に感じ入りました。

大阪府大阪市 火 伏 正 文

（歴史研究家）

（会友總数一二名）

大阪府羽曳野市 高木保生
(河内源氏壱井八幡宮宮司)

京都府京都市 西川玄房
(豊國公菩提寺東林院住職)

△特別寄稿△

秘話(歴史物語)

悲運の駒姫と栄光の母磐代の君

山名 晴彦

伯耆の国、打吹城主、山名氏豊は吉川元春との戦い（天正八年（一五八〇）八月十三日）に於いて無念の敗北を喫し、遂にその居城の打吹城を放棄し、再起を図るべく、部下数名の将兵とともに一族を頼って逃亡を続けたが、敵軍の探索は殊の外厳しく、遂に青谷莊（注四）鳴瀧村の山中に於いて、悲愴な最期を遂げ、これによりさしも一国の管領であった伯耆國山名氏は滅亡した（同、八月十五日）とされている。

ところが、これより先氏豊は、打吹城の落城を予期してその寸前（注五）にたった一人の愛娘を、予め想意にしていた三明寺近郊の農家に預け、その養育を託していたのである。そして、たまたまその農家は駒井姓を名乗つていたので、愛娘は人々から駒姫と呼ばれるようになった。そしてその駒姫は長じるに及び世を忍ぶ為、殊更山名姓を名乗ることを避け、同郷の農家に嫁ぎ質素な生活に甘んじ、ひたすら討死した亡父や家の靈を慰めながら悲運の生涯を閉じたと言われている。

駒姫には娘があり、"りん"と名付けられていたが、さすがに血は争えぬもので、"りん"は生まれつき容貌の外美しく、又気高い品性を兼ね備え、更に英邁で理智に富んでいたので、当時の領主池田氏の家老、荒尾志摩守の家臣で倉吉に住む岩室常右衛門宜休といふ武士に見染められた。しかるに当時の身分制度は特に厳しく、武士と百姓の婚姻はご法度であった為、止むを得ず常右衛門は武士を捨て、"りん"と共に京都に駆逐したのである。そして、当時有名な医師、馬陶賢の門下生となり、師の許で十余年の歳月を

かけて医術を研鑽し、遂に医師として名をなすに至り、師より名前の一字を貰い受け、岩室宗賢と称するようになった。この間、"りん"と宗賢との間には一人娘の"つる"が生誕（長じて"とめ"とも言う）しているが、これが後の世の"磐代"の君である。

"つる"は十六才の時、父の岩室宗賢が医師として出仕していた禁裏御使番生駒守意の屋敷に行儀奉公に出たが、"つる"は生駒夫妻から実子の如く可愛がられ、

行儀作法は勿論のこと、読書、書道、茶道、華道、料理、詩歌、絵画、舞踊等、女性としてのあらゆる教養を身につけ、稀に見る才媛としての誉が高かつた。たまたまこれが禁裏の女官、"長橋の局"の知るところとなり、特に乞われて"長橋の局"の屋敷に奉公することになった。

"長橋の局"は美貌と教養と理智に富んだ、"つる"を殊の外寵愛された。"つる"は"長橋の局"に奉仕することによって更に常識を広め、その上達裏の作法、しきたり等をことごとく会得するようになり、"長橋の局"の信任は益々厚くなつたと言わわれている。

当時、"長橋の局"の屋敷には中御門天皇の皇女、宮成子内親王が度々遊びに来られ、"つる"の教養のある人柄と非凡な才能に魅かれ、すっかりお気に召されたが、篠宮が後に閑院宮典仁親王の妃になられてからは、今度は宮家に参殿する身分になつた。これは、"つる"が二十三才の時である。

第三回総会および年間運営に熱いご支援をたまわりました。おかげをもちまして何とか運営ができておりますが、根本的な方策を考えなければ……

昭和六十三年一月以降分
と思うことしきりです。

御協賛御礼

金二万円也	及川敏子殿
金三万円也	山名武男殿
金一万円也	宮田靖國殿
金拾万円也	山名章殿
金一封	山名家殿
金一万円也	宮田靖國殿
金三万円也	山名源太郎殿
金拾万円也	太田垣泰明殿

全國山名氏一族會報

に閑院宮典仁親王から側室になるようお申し付けが
つた。"つる"はたとえ山名氏豊の末裔とはいえ身分
の低い者が余りにも畏れ多いことなので固くご辞退申
し上げたが、再三再四のお申し付けがあつたので、意
を決し側室としてご奉仕することになった。この時、

"つる"は生駒守意の養女となつて身分をととのえ宮
家に参殿することになったが、宮家からは特別の恩召
して"大江"の姓と"磐代"という格調高い名を賜わ
っている。時に明治七年(一七七〇)のことである。

翌明和八年五月、閑院宮妃は病の為薨去、同年八月、
"磐代"の君には目出度く第一王子ご出産、祐宮と申し
上げ、その後引き続き寛宮をお生み申し上げている。

安永八年(一七七九)第百十八代後桃園天皇崩御、天
皇にはお世継ぎの皇太子がおられなかつたので皇室会
議の結果、閑院宮の第一王子祐宮が皇位を繼承するこ
とになり、翌安永九年(一七八〇)、第百十九代の天皇
として即位された。即ちこの方が光格天皇である。

天皇は、御年僅か九才のご幼少であつたので、閑院
宮と関白太政大臣の藤原尚美卿がご後見申し上げてい
るが、山名氏豊の末裔が天皇のご生母となつたといふ
ことは、山名氏一族として、これ正に栄光の極みと言
わざるを得ない。

"磐代"の君は光格天皇ご即位のあと、閑院宮典仁親
王と共に宮中に出仕、ご幼少の天皇のご養育に専念し
たが、典仁親王薨去のあとは出家して蓮上院と称せら
れ、聖護院宮別邸で余生を送られた。文化九年(一八
一二)逝去。六十九才であった。後世朝廷から特旨を以
て当時の臣下としては最高位の従一位が贈られたが、
更に打吹公園内に磐代神社が建立され、神として祀ら

れていることは案外世に知られていない。

光格天皇は日本の古典、漢書に精通、又書道を良く
され、儒学の精神に培われ、素朴で剛毅なご気性で稀
に見る英邁なお方と承つてゐる。ご在位三十七年で次
の仁孝天皇に皇位を譲られたが、七〇才の天寿を全う
されて、天保十一年(一八四〇)に崩御された。

この光格天皇のご体格と、ご気性が良く似ておられ
るのが、ご曾孫にあたる明治天皇であると言われてい
る。ちなみに明治天皇のご幼少の頃の宮号は光格天皇
の宮号と同じ祐宮であった。

(注二) 山名時氏の長男、師義が築城したもので、

現在は打吹公園として、倉吉市の象徴とな
つてゐる。

(注三) 山名宗全の二男、勝豊の孫。

(注四) 毛利元就の二男、後の岩国城主。

(注五) 山陰本線浜村駅(特急)または青谷駅(普通)
下車。青谷山名神社には山名氏豊が祀られ
名寺がある。

(注六) 大典侍藤原保子の方、中御門、桜町両天皇
にお仕えしている。出家して即心院と称せ
られる。

(注七) 第百十四代の天皇。

(注八) 平安時代、菅原氏と並ぶ学識ある者に与え
られた名門の家柄。

(注九) 後の聖護院宮孟仁親王。

(注十) 有栖川宮、閑院宮、伏見宮、桂宮の四親王
宮家で構成。

金一万円也 日置 采左衛門 殿

金一万円也 山名 正春 殿

金一万円也 太田垣 英幸 殿

金二万円也 平野 俊堂 殿

金二万円也 山名 弘宰 殿

金三万円也 三王 紀将 殿

金三万円也 太田垣 泰明 殿

金三万円也 山田 利春 殿

金三万円也 山名 信益 殿

金五千円也 山名 繁 殿

金二万円也 宇野 誠 一 殿

金二万円也 宮田 靖 國 殿

金二万円也 宮田 靖 國 殿

金二万円也 山名 弘宰 殿

金五万円也 太田垣 泰明 殿

金五万円也 山名 弘宰 殿

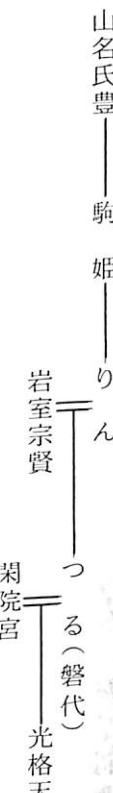
金三万円也 宮田 靖 國 殿

金三万円也 宮田 靖 國 殿

金三万円也 宇野 誠 一 殿

金三万円也 東林院 殿

金三万円也 東林院 殿



* 駒姫の末孫が当会会員駒井正一氏。(史料提供は中島憲仁氏)

△特別寄稿△

源氏のふるさと

山名光宗

△河内源氏△

「今は昔、円融院の天皇の御代に左馬の頭源の満仲という人ありけり。……國々の司として勢徳もならびなき者にてぞありける。終には摂津守にてなんありける。摂津の國豊島の郡に多田というところに、家をつくりこもりいたりけり。皆兵の道に達れり」（今昔物語）

源満仲は多田満仲として知られている。清和源氏の祖とされている貞純親王（清和天皇第六皇子）の嫡孫にあたり諸國の受領（地方長官）を歴任したが、やがて鎮守將軍に任せられた。のち摂津守となり。摂津豊島郡に多田莊（兵庫県川西市）を開いて本拠とし多数の郎党を養つて武士団を結成した。安和二年（九六九）三月、彼がその武力を背景として藤原一門の陰謀に加わり左大臣源高明をおとしいれた事件は、安和の変として有名である。満仲には、武略に長じた頼光・頼親・頼信らの子があった。丹波の大江山の酒天童子を退治した説話で有名な頼光は父のあとを継いで摂津源氏を称し、頼親は、大和の国に移つて大和源氏の基を開いた。そして、四男の頼信は、伊勢・陸奥・甲斐などの守（長官）をへて、常陸の介（次官）、鎮守府將軍にすんだが長元元年（一二〇二）におこった平忠常の乱を平定して、武名をあげた。その功によつて美濃守に任せられ、ついで河内守となつて、

南河内の古市郡（羽曳野市附近）に館をたて、これを本拠とした。これが河内源氏のはじめである。ところで諸氏系図中もつとも信頼できるといふ「尊卑分脈」はこの頼信をもつて「源氏一流正統」としている。清和源氏の嫡流は右に述べたように満仲のあとをうけた摂津源氏の頼光でありその子孫である。しかし彼らは京都になれたしみ、武士というよりは、むしろ貴族の生活をおくっていた。これに對して河内源氏は

頼信の子頼義・孫の義家とづく三代にわたり、武士としてめざましく活躍し「武勇の家」の榮誉をほしいままにした。これに對して河内源氏は梁としての正統は、河内源氏にひきつがれたのである。頼義の名が大いにあがつたのは、前九年の役において安部氏を平定したときである「陸奥話記」は、この戦いの経過をのべたものであるが鎮守府將軍源頼義は「性沈毅にして武略多く、最も将帥の器たり」と最大級のほめことばを用いている。

彼は日頃から八幡の神をうやまい、前九年の役に陸奥に出征するとき、山城の石清水八幡宮に戰勝を祈願した。やがて康平七年（一二〇六四）勝利をおさめて帰国し、八幡宮を勧請した。壺井八幡神社（羽曳野市壺井）がこれである。

△八幡太郎△

この頼義の嫡子が義家である。七歳の春、石

清水八幡宮の社前において元服し、八幡太郎と号した。「尊卑分脈」にはその出生について、頼義が八幡宮に参詣したとき、靈夢の告げによって三寸の靈剣を得た。頼義は感激して一家の宝物としたが、この月妻がみごもり、義家を生んだ」とある。昔から聖人とか英雄の誕生について、こうした話はつきもののようにあるが、それが武の神の八幡神、および靈剣とむすびつけられたところに、もっともらしさがある。武勇の家に生まれた義家は、生まれながらにして天下第一武勇之士（中右記）であることが要求された。そして前九年の役に父の頼義にしたがつて武功をたて、「驍勇（たけだけ）強く強い」と絶倫にして、騎射神の如し（陸奥話記）とたえられた。彼は永保三年（一二〇八三）九月、陸奥守となり鎮守將軍を兼任して任地におもむいたが、そのときまたまたおこつた後三年の役は、名将八幡太郎義家の名を広く天下に知らしめた。京都の公卿中御門右大臣宗忠の日記（中右記）には「武威天下に満つ。誠に是れ大將軍に足る者なり」とするしてある。そうしたことから、義家の死後もなお民衆のあいだでよく知られ、その武勇を伝える話はまことに多い。「梁塵秘抄」にのせられた

「わし（鷲）のすむ山にはとり（鳥）はすむものか、おなじき源氏と申せども、八幡太郎はおそろいや」

という歌は、「おそろしき武士としての義家を鷲にたとえている。その武勇のほどは人から人と語り伝えられていくうちに、やがて文武兼備の名将として神格化され、かずかずの八幡太郎伝説を生みだしたのである。頼信・頼義・義家と続く河内源氏の本拠として、石川の流れが金剛・和泉両山地の水を集め、河内平野に出よう

とするあたり、古市郡壺井の地であった。起伏にとんだ地形は戦斗訓練にもつごうのよい軍事上の要害であり、また農業経営にも適して経済上の地盤を確立するにも絶好の地であった。彼らはここを根拠地として、源氏の興隆につとめたのである。

なお、三代の墓は壺井八幡のすぐ南、通方寺の跡にある。

通方寺は、長久四年(一〇四三)九月頼義が狩獵の途中、山中で千手觀音の像をひろい、これを本尊として、自宅の南に建てた寺であるという。亨和元年(一八〇二)に刊行された「河内名所図会」によると、当時は觀音堂・鎮守社・頼義廟舎などの諸堂宇があつたらしが、そののち寺運がかたむき、明治六年(一八七三)廃寺となつた。いまは石垣がのこるだけである。

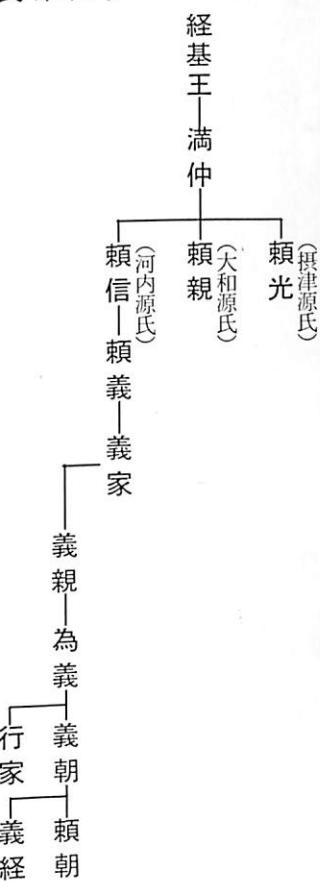
頼信公が通方寺東方の山中で拾つた仏像をまつるため、小堂を建てたのがこの寺の始まりで一〇四三年の創建、河内源氏の隆盛とともに榮えた寺も南北朝時、楠一族とともに足利とたたかい八幡宮とともに再三兵火をうけた歴史をもつています。

一七〇〇年(元禄十三年)徳川綱吉が柳沢吉保に命じて新本堂の再建などを実施させたものの、明治初期に廃寺となり今日に至っています。山門をはいるとすぐ左手に源頼義公墓があります。通方寺旧本弗床下に葬られた墓堂形式でしたが新本堂再建のとき本堂は現鐘楼わきにうつされ現在のようになつたもの。通方寺前の道路を東に百メートル歩くと右に源氏三代墓の標識があり、小道を登りきっと右に八幡太郎義家公の墓があります。

前九年の役、後三年の役で義家公の名はあまりにも有名武将として初めて院への昇殿が許されました。一一〇六年京都の邸宅で死去。しかし、地元の伝承では一一〇五年八月十八日、六十八歳で死去とされ正史の記録とは約一年のずれがあるそうです。義家公の墓の西百メートルには河内源氏の祖頼信公の墓があります。一〇四八年九月一日、七十四歳で死去。遺言でこの地に葬られたと伝えられます。

(羽曳野散策より)

〔源氏系図〕



山名町の亡靈伝説

(今出川堀川上る西入)

つゆ明けを告げる激しい雨の夜、応仁の乱の西陣方大將山名宗全はよみがえる。

格子越しに耳をすますと、戦場を駆けめぐる武将らのざわめき、甲冑のすれ合う音「ガシャガシャ」「ワーワー」実は低い町家の屋根をたたく強い雨音。「ガツチヤンガツチヤン」とハタ織の騒音、西陣らしい伝説、しかし昨今町並みは変わり、織機の音も聞えず、宗全さんは…………。

△この項は山名繁氏提供「千本郵便局だより」△

常任理報告

○十一月十三日 開催

○京洛 妙心寺東林院席

○參加役員 一六名

協議事項

一、第四回總会計画

期日・会場(下欄及び別紙参照)

二、史料調査研究部会発足

二頁及び別紙参照

三、顕彰事業

壺井八幡宮に職寄進(左記参照)

山名氏史料館「山名藏」充実

山名氏各家位牌奉安

山名氏家系図作製協力

石の上にも三年といいますが、その節目を越えて、来年は第四回總会をむかえます。回を追うごとに充実した總会が開かれ、心強いかぎりです。

会場の但馬は山名氏本拠の地だけに、由緒を誇る遺跡も数多く、広範な地域に散在していますので、一日や二日の短時日では回りきれませんが、回を重ねてそれらの遺跡から声なき声を聞く.....それが當会の使命でもあろうかと、ふるってご参加をねがいます。

○期日 昭和六十四年四月二十二日(土)～二十三日(日)

○会場 兵庫県城崎日和山温泉 政府登録「金波楼」

※くわしくは、別紙にてご案内いたします。

山名氏桐箪紋の旌旗
壺井八幡宮社頭に翻える!

当会監事三王紀将氏がこのたびも

また壺井八幡宮にのぼり竿七本を寄進されました。そこで、当会も山名

氏伝統の「桐箪紋」を染めぬいた大

のぼりを奉納することとしました。

新春には威風堂々と社頭にひるがえるはこびです。初詣にはぜひどうぞ。

あとがき



◎ 師走となりました。お歳暮がわりに第三号をお届けします。

◎ 今号は、三千部印刷。つまり、全国三千の山名さん全員に當会の動きをご報告するためです。のぼりを奉納することとしました。

◎ 入会をひかえていらっしゃる方、危ぶんでいらっしゃる方、家名に誇りをもってご連絡くださいませんか。お待ちしております。